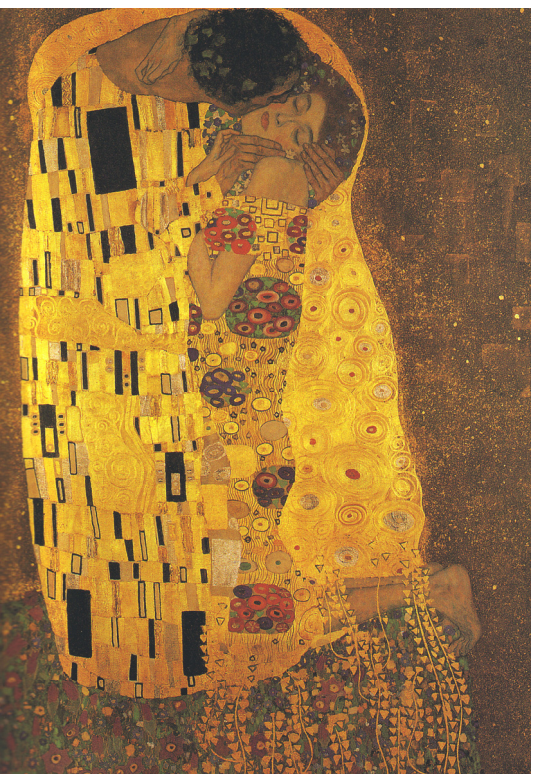


## 歩きながらの妄想日記（クリムト その一）

TBS前の一ツ木通りに出て、僕は忙しく行き交う人たちに圧倒されてオロオロした。自動車が溢れ、煉瓦で化粧された歩道にはサラリーマンやOLがひしめいていた。まだ、みすじ通りや田町通りなどには昔の面影が少しは残っていたが、ここは様子がすっかり変わっていた。本籍は赤坂、高輪に菩提寺があり、正真正銘の江戸っ子だと自認していたのに、僕はまったくの「お上りさん」になっていた。

江戸町人の娘で、十一人もの子供を育てた気丈で働き者だった祖母——僕が中学生の頃にはもう八十五歳前後で足が不自由なため、駅の階段を僕が背負って上がった。いつも「恥ずかしいね、悪いね」と言っておぶさる。腰が曲がり縮んで軽くなつた体の感触をまだ憶えている。この血筋を辿ると、歌舞伎で有名な江戸町火消しの新門辰五郎しんもんたつごろうと関係すると聞いた。それに学校も仕事場も一度も都心を離れたことがないというのに、この体たらくである。

### クリムトの「接吻」が無造作に飾ってあった

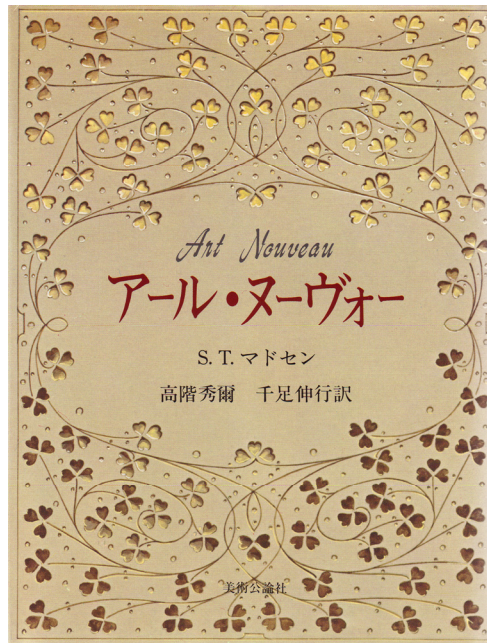


「なんてことだ！」とぼやいたものの、どうにもならない。ともかく乃木坂まで出ようと、早足ですれ違う人を気にしながら歩き始めた。そこで輸入物のランプや壺や壁掛けなどが雑多に並べられている店のショ

ーウインドウに、無造作むぞうさに置かれていたクリムトの「接吻」を見つけた。オーストリアのアール・ヌーヴォーを代表する画家グスタフ・クリムト（一八六二〜一九一八年）の代表作である。

数年前にデパートで偶然見かけ、「クリムトも悪いものではないなあ——」と思  
い改めるようになってから、いつか手に入れようと考えていた絵である。飾ってあ  
ったクリムトの「接吻」はもちろん印刷で額縁代の値段だった。安かった。それで  
買おうか買うまいか、どうしようか迷ってショーウィンドウの前で足が止まってし  
まった。

クリムトは、ふんだんに金箔きんぱくを使う技法とモザイク技法、それと男根のシルエッ  
トからさまざまな人物像をとりだすジクソー・パズルのような「形遊び」にこだわ  
りながら、女性を甘美で官能的に、そしてきわめて装飾的に表現するのを得意とし  
た画家である。その彼が円熟期の一九〇七〜一九〇八年、四十五〜四十六歳のころ  
に描いた最も有名な作品が「接吻」である。



昔は僕はクリムトは好きではな  
かった。作品が放つ雰囲気が入らな  
かった。それとは理由は違うが、アー  
ル・ヌーヴォーを再評価しはじめた人  
たちのクリムト評も昔は必ずしも良  
くはなかった。

クリムトの装飾趣味は、少なくとも内容に関する限り、描かれたモチーフや人物  
とは特に関係はない。形式的に両者は一つに溶け合っているが、それには深い意味  
は認められない。こんな風に批評されてもいた。（「アール・ヌーヴォー」S・T・マド  
セン著 高橋秀爾・千束伸行訳 美術公論社 一九八三年三月初版）

クリムトが再び注目されるようになったのは、この十年あまりのことである。日  
本でも若い女性を中心に人気が高まった。バブルがはじけ、絵画ブームが今は昔と  
なった中でもクリムトは頑張っている。今年の一月から四月に新宿の安田火災東郷



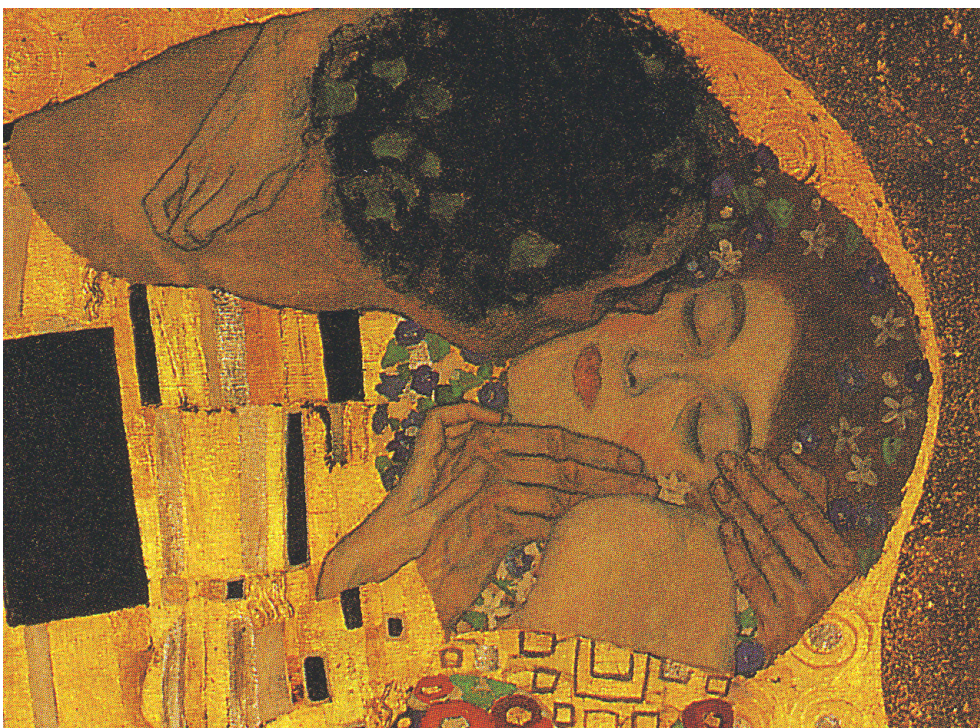
青児美術館で開催された「ウィーンの世紀末展〜クリムトの夢、シーレーの愛〜」には十四万人もの人が来場した。これを皮切りに全国各地を巡回して展示会が開催されたが、どこも好評だったという。

現実の人や自然を美しい夢の世界に生まれ変わらせるのがクリムトの夢だ。クリムトの絵の中では人も自然も永遠の若さと美に包まれている。昔の絵では珍しくなかった金地やモザイクをクリムトはよく使った。これは一種の時代錯誤で、クリムトは現実逃避の効果を狙った。それは現実から白昼夢の世界に逃げ込むための魔法の杖のような役目を果たしている——アール・ヌーヴォーの研究者として知られる千束伸行・成城大学文学部教授はウィーン世紀末展の主催者でもある読売新聞紙上で、こんなことを語っていた。

「クリムトの夢」がいったい本当はなんだったかは僕には分からないけれど、たしかにクリムトの作品は、どこか白昼夢はくちゆうむというか幻想的はくちゆうむというか、独特の「気」を放っている。若いころの僕には、それが

鼻に付いた。それに潜在的に官能を罪悪視するような感情も強く持っていたように思う。なにしろ大学時代でも「九時まで坊や」などとからかわれたような生活を送っていたのだから。その頃は月並みにセザンヌとかデュフィとかユトリロとかが良いと思っていた。

ところが多くの人の様々な死を見つめながら、自分自身も一年近く生死の狭間はくまをさまよう体験をし、さらに親父の死を契機



に浄土宗の菩提寺ぼだいじにも足を運ぶようになったこと、それに何よりも、すべてをいい思い出として受容できるような年齢になってきたことがあるのだろう。クリムトの作品は退廃的というより、生を心から謳歌おうかしたいという熱い心が込められたものだと思うようになってきた。アンコールワットの寺院を飾るなまめかしい女神デヴァターに魅せられるようになっていいることと無関係ではあるまい。

「今日ではなくて、今度、ゆっくり見て決めたら」

クリムトの「接吻」が飾ってあるショーウィンドウの前で、一人こんな感慨ふけに耽り、買うか買うまいか思案し続ける僕の脇を、邪魔だという顔付きで人が次から次へとすり抜けていく。この忙しい時間に何やっているんだ——そんなふうに思っている気配をピリピリ感じる。ついさつき清水谷公園で見た疲れ切った表情の人は周りには見当たらない。終業時間前に、もう一仕事すまさなくてはと追われている感じの人たちばかりである。

しかも、ただ仕事で忙しいというふうでもない。人々の表情や目付きが昔と明らかに違う。張り切っているアジアの人たちに会う機会が多いけれど、彼らとも明らかに違う。職場環境が厳しさを増しているのか、閉塞感へいそくかんに苛さいなまされているのか、イライラ殺気立ころもたっている感じがする。伸び伸びとか、おおらかとかいう感じとはほど遠い。生を謳歌おうかしているなどという雰囲気は微塵みじんもない。もつとも、刹那せつな的な逃避を求め、「五時から男」や「五時から女」に変身することですでに頭が一杯になっている人たちも混じっているのかも知れないのだけれど……。

いずれにしても立ち止まって人の流れを邪魔し続けられる空気ではなかった。どうせすぐには売れないだろう。色の具合もちよつと今ひとつの感じだし、黒塗りの額縁もどうかと思うなどと、いろいろと難癖なんくせをあげづらい、その場を離れようとした。でも、後ろ髪を引かれ、踏ん切りでき踏ん切りがつかなかった。

そんな時、またもやお遍路へんろさんの気持ちで歩いている僕の「同行二人」どうぎょうににんの声が聞こえた。

「今日ではなくて、今度、ゆっくり見えて決めたら」

「そう。今度にしよう。ゆっくり眺めてから決めればいいや」

そう呟やぶいて、ようやく動きはじめた。間口が狭く奥行きおくゆきの深い店の奥の方から、ジーと僕の様子をうかがっていた中年の男性の姿が消えた。店の人だったのだろう。前から歩いてきたOLが、胡散臭うさんくさそうな表情をあらわにして通り過ぎた。ヨロヨロしているし、身なりも変だし、無精ひげも汚らしく生やしている。無理もあるまい。

甘美とか官能とかとは縁遠い風体ふうたいの老年の域に入ろうとする男が赤坂の一本通りで、それもあまりパツとしない店に飾られているクリムトの「接吻」に見入っている。どう鼻眞目ひいきめに見ても様にならない。だいたいクリムトが良いなんて言うのは女性で、それも若い女性に多いからだ。

一九九七年秋 伴 友貴